

7
三宅喜二郎元大使寄贈史料
52.6

※註、重複セリト雖、後日外交文書
編纂ノ便ニ供スル為合纂ス

REEL No. A-1204

0020

アジア歴史資料センター

第三世印度獨立運動の経緯

一九四二年一月十日附大本營政府連絡會議決定「滿洲、南洋、印度、海上交通路、遮断
 中印度、南インド部分の対印施策、重要事項（一）印度、海上交通路、遮断
 （二）印度、南インド反英策、廢止、反英運動の活性化スル爲メ
 宣傳、強化ニ置クコト、（三）対印施策の根本的改善ニ關シテ關係各
 機關連絡ニ協力スルコトヲ、（四）対印施策の根本的改善ニ關シテ本營陸軍部
 ハ岩崎少将（當時文佐）ヲ兼テ、岩崎機關ヲ設置シテ対印施
 策、實施機關ヲ組織スルコトヲ、（五）岩崎機關ハ盤谷ニ本部ヲ置キ
 （後ニシンガポールニ移シ、（六）岩崎機關ハ「右大本營
 政府、政府連絡會議」決定ニ基キ東亞在任者萬印度人ヲ
 組織シテ共ニ印度獨立運動、波ヲ昂揚シ英、荷、露ヲ利用シ
 印度内部ノ反英策運動ヲ刺戟セントスルノ活動ヲ開始セリ
 他方「シンガポール」陥落ヨリ東亞各地印度人間ニ獨立運動

外務省

9-29-2 (310)

ノ氣運大ニ動キ日本は、日中、「R・B・ボース」「サハイ」等
 其、牛車ヲトリ印度人停滯中、「モンシン」大尉ハ印度國民軍、
 名ニ於テ停滯中、同志ニ呼懸ケ次第二運動ハ活潑化スルニ至レリ
 一九四二年四月「R・B・ボース」「モンシン」大尉其他馬來、
 泰等ニ在ル印度人ノ代表ハ東京ニ會シ獨立運動ヲ議シ「大會ヲ盤
 谷ニ開キ獨立運動ノ活動、活潑化ヲ止スルコト」ヲ議決セルモ同時ニ本
 運動ハ飽達印度人ノ自主的運動トシテ日本ノ走狗トナルヲ避ケル主
 義ヲ明ラカシメ同會議ニハ日本人ノ傍聴ヲモ認メザリシ狀況ナリキ
 右會議ニ基キ同年七月盤谷（「オリエンタル・ホテル」）ニ於テ大會
 ヲ開催シ「R・B・ボース」議長、下ニ馬來、「ビルマ」、香
 港、上海、比島、「シヤワ」等ノ諸代表的四〇名參集シ印
 度獨立聯盟ヲ樹立シ（會長「R・B・ボース」）下ニ委員五名
 アリ本部ヲ盤谷支部ヲ東亞各地ニ置ク（獨立運動ノ統一實

外務省

施ヲ議決セリ 本大會ニ於テ約四十條ヨリナル所謂盤谷決議採擇セラレ本決議ニハ武器供與、借款供與、日本ト正式代表、交換、印度國民軍ヲ同盟國軍ナミニ取扱フベキコト等ヲ要請セル、外將來日本ガ英國ノ印度統治ヲ覆滅セル場合ヲ想定シ其ノ際日本ノ印度ニ對スル政治的經濟的野心ヲ封センガ爲凡有角度ヨリ印度ノ完全獨立ヲ規定シ右各條ニ就キ其ノ承認ヲ日本ニ要請セルニ當時、東條總理兼陸相ハ之ヲ不遊ナリトシテ解答ヲ與ヘズ、爲ニ印度獨立聯盟内部ニ於テ疑惑漸次深マルニ至リタルヲ以テ岩畔大佐ハ止ラ得ズ岩畔機關ト名ニ於テ帝國政府ハ右決議ヲ支持スヘキ旨、解答ヲナシタルニ一般印度人間ノ對日不信ノ念ヲ解消スルニ至ラザリシ経緯アリタリ

同年七月印度人停虜中日本ニ敵意ヲ有セザルモノヲ解放シ日本側ヨリ函獲兵器、被服、供與等ヲナシ茲ニ印度國民軍ハ正式ニ成立ヲ見(約一萬五千ニ)ガ補助部隊トシテ各地ニ於テ義

外務省

勇軍ヲ募集マルコトシ「モンシ」大尉ハ自少將ニ任シ同國民軍ノ司令官トナリタリ

然レドモ同年末ヨリ翌一九四三年二月ニ至リ印度獨立聯盟ハ危機ニ見舞ハルニ至レリ、盤谷決議ニ對スル日本側回答ノ問題ヲ契機トセル印度人一般ノ對日不信感ハ漸時濃化セルノミナラス「モンシ」司令官ノ武斷獨裁的傾向ニ對シ他ノ文治派委員ハ反對シ(他方「R・B・ボース」ハ日本ノ「ロボット」ナリトノ反感モアリタリ)内部統制紊レ國民軍間ノ騷擾事件ヲ惹起シ其ノ解散提議等アリ遂ニ一九四三年二月ニハ「モンシ」司令官ノ辭職、委員ノ連袂辭職等ノコトアリ「R・B・ボース」ノ外ニ委員一名ノミ殘留スルノ危機ニ遭遇セリ偶々「S・C・ボース」ノ東亞進出アリ、此處ニ東亞ニ於テハ印度獨立運動ハ活ヲ得テ新發展ヲ見ルニ至レリ

外務省



ニ大東亞戰爭開始前印度、監獄ヨリ脱出シテ「アフガニスタン」蘇聯
 邦經由獨逸ニ赴キ同地ニ滞在ナリシ「スバス、ナヤンドラボー
 ス」氏ハ大東亞戰爭開始後、東亞ニ於ケル前紀記印度獨立運
 動情勢ニ對シテ多大ノ関心ヲ示シ印度獨立聯盟ニ對シテ鼓舞激勵
 ノ放送ヲナレタルガ、當時歐洲ニ於ケル軍事情勢ハ獨ニ有利ニシテ、
 殊ニ一九四二年夏「ロシヤ」ノ埃及作戦ハ大ナル成果ヲ擧ケ
 「ナイル」溪谷ヲ脅威スルニ至リタルヲ以テ、獨ハ對印宣傳ニ「
 ・B・ボース」氏ヲ利用シ、同氏又獨逸ニ於ケル活動ニ興味
 ヲ有シ居リタルモ、元來獨逸ノ印度獨立運動ニ對スル熱意ハ
 單ニ印度ニ暴動ヲ惹起シ、英米帝國ノ戰爭遂行能力ヲ減殺セ
 ントスルノ範圍ヲ出テザルノミナラズ、其ノ對國政策或ハ對蘇聯政
 策ハ「ボース」ノ企圖同得ザリシヲ以テ、一九四二年十月以
 來「アフリカ」ニ於ケル獨逸ノ戦勢不利ナルニ及ビ東亞行ノ希望ヲ表

外務省

明スルニ至レリ、
 在獨大島大使ヲ通シ右希望、通報ラ受ケタル外務省、當初心ズシモ「ボ
 ース」氏、日ニ其意同ヒズ是非未タケレバ、迎フルモ、未日前ニ「コミ
 ヲト」スルコトハ避ケ、ブレトノ意圖向ヲ有シ獨逸側、本件ニ對スル態
 度明トナル迄ハ何等「ボース」ニ對シ其ノ未日ヲ懸念スルガ
 如クコトヲ避ケ、且日大島大使ニ訓令スル所アリタリ、
 尤モ對印施策、擔任機關タル大本營陸軍部ハ獨々在東亞印度人間
 ノ運動前記、如ク危機ニ際會セントシ居タルヲ以テ「ボース」氏ヲ東
 亞ニ迎ヘテ對印工作、行詰詰リヲ打開セント、希望アリ、陸軍側ニ於
 テハ外務側ト連絡スル所ナク、何等措置ヲトリタルヤモ知ラズ、
 何レニスルモ、獨逸側「ボース」氏、東亞行ニ其意ヲ表シ獨逸
 潜水艦ニ依リ歐洲ヨリ「マダガスカル」附近ノ海面迄來洋上ニ
 於テ日本潜水艦ニ移乘シ「スマトラ」ノ「サバン」ニ來着

外務省

此の(外務省ハ「ボース」ノ離獨直前其、奉朝ノ計畫ヲ通報
 セラレタルノミナリキ)
 斯而一九四三年五月「S・U・ボース」氏、東進進出ヲ見ルヤ
 大本營陸軍部ハ必カ連絡機關トシテ光機關ヲ設ケ、同機關ハ南方
 總軍司令官ノ隷下ニナリテ、軍事、政治、外交等諸般、對
 印施策ニ關シ南方軍總司令官及大本營、指揮ヲ受ケテ活動セリ
 光機關長ハ一九四三年五月ヨリ翌年一月迄山本大佐ニシテ、
 九四四年一月ヨリ翌年八月迄ハ磯田中將ナリ

外務省

三一九四三年五月「S・U・ボース」氏ノ奉朝スルヤ岡田ヨリ獨立軍ヲ實施方針ニ
 就テ種々帝國政府ニ對シ政策スル所アリ就中岡田六月七日在光外
 務大臣ニ提出セル演説ニ於テ「ボース」ハ當時、印及「ボース」派カ
 英兵ノ安撫ヲ因テトスルヲニ、政治攻勢ノ亦ニ對英和協ノ可能
 アリ他方日本ノ對印作戦開始、進出カ印及内同志ノ矢張り「薩摩」ニ
 自由印及軍ノ志氣沈滞ヲ示シテ、旁々以テ危機ニ際シ英測ハ日本
 ノ對印聖心乃至印及ヲ擁護トスル對英安撫意志ヲ宣傳シテ其況ニ
 鑑ミ「ボース」及的連カニ印及進出作戦ヲ開始スルコトニ於テ全面的進出作
 戦ノ實施不可能ナル時ハ「ボース」氏ニ於テ「ボース」等東部印及ニ對スル部分的
 進出作戦ヲ開始スルコトニ印及獨立軍進出ニ對スル日本及英兵ノ強カナル
 形ヲ印及内都ニ及映スルハ自由印及後政府ヲ樹立シ軸各國承認ヲ得
 ントラカ護スルコトアリ「ボース」氏ハ大本營ハ積極的ナル態度ヲ示シタルモ「ボース」氏
 テハ帝國政府之ヲ考慮スメントノ目的ヲ得テ「ボース」氏ハ「ボース」氏進出作戦

外務省

一歩ヲ踏ミ出スコトナレリ。ボース氏ハ地理ニ於テ印度国民軍ノ
整備ニ努ムルト共ニ假政府樹立ノ計畫ヲ進メタル模様ナルカ南方
総軍ハ之ニ対応シ極メテ冷淡ナル態度ニ出テタル為一時頓座セルモ後
匈童光大臣以下外務側ノ中央ニ於ケル努力ニ依リ十月九日大本營
政府連絡會議ニ於テ左記ノ決定採擇セラレタリ。

印度假政府承認ニ関スル件

昭和十八年十月九日

大正堂政府連絡會議決定

「S. C. ホーズ」ニ於テ印度假政府樹立ノ内容ハ印度施策殊ニ要ノ
宣傳攻勢強化ノ為帝國ハ之ヲ承認ノ意思ヲ表明スルモノト又右
ニ伴ヒ本假政府トシテ「ボース」氏ノ國際關係ヲ發生セシメサルコト勿
論トス

備考 「ボース」氏ハ同政府首席ニ推挙セラレタリ

外務省

斯の同年十月二十一日昭和ニ於テ開催セラレタル印度独立聯盟年
表代表者大会(ボース)氏ハ同年七月同聯盟總裁及印度國民
軍最高指揮官ニ就任セリニ於テ「ボース」總裁ハ自由印度
假政府樹立ヲ提案シ万が一致ヲ以テ可成同日ヲ以テ假政府ハ
成立シ「ボース」氏ハ同政府首席ニ推挙セラレタリ
高岡政府ハ之ノ鞏固的過渡的性質ニ鑑ミ殊稱ラ簡素
ナルモノトシ主席ノ下ニ軍事、外務、財政、宣傳、婦人ノ五部ヲ
置キ(軍事部長及外務部長ハ主席兼任)外ニ無任所大臣
及内閣顧問若テラ置ケリ
而シテ印度國民軍ハ假政府ニ属シ「ボース」主席ノ統帥ノ下
ニ置カレ従来ノ独立聯盟ハ假政府ト表裏一休トナリテ獨立運
動ヲ推進スルコトナレリ

外務省

四、茲ニ於テ帝國ハ既定方針ニ鑒キ同月二十三日回政府ヲ承認セリ本件承認ノ法的性質ニ就テハ純粹ノ國際法上ノ議論トシテハ未ダ自由印度國ノ成立ヲ以前ニ如何ナル政府ノ承認モアリ得ス當時ノ帝國政府贊成ニモアルカ如ク結局自由印度假政府ヲ自由印度假政府トシテ名称ヲ有スル團體トシテ承認スルト云フ意味ヲ有スルニ過ラズト云フ一キヲランモ又同ニ承認ハ目下完成途上ニアル自由印度國ノ政府ノ承認トモ云ヒ得ベク豫言セバ將來自由印度國成立ノ場合ハ右承認ハ實際法上正當ノ政府承認トナルキヲ以テ謂ハル停止條件附ノ政府承認トシテ此ノ限りニ於テ一種ノ政府承認ト云ヒ得ベシ、公約ニハ帝國政府ハ以見解ヲ探ルコトセリ。

帝國ノ承認ニ引續キ「ヒルマ」ハ十月二十三日獨逸ハ同二十八日比律賓ハ同二十九日中華民國及滿洲國ハ十一月一日印太初

外務省

同日系西ハ同十七日「クロアチア」同十八日又々自由印度假政府ヲ承認セリ尚同假政府ノ依頼ニヨリ帝國政府ヨリ中立諸國ニ對シテモ假政府成立ノ報告ヲ傳布セルモ中立諸國ハ右通告ニ對シ何等措テ採リタルモノナシ。

假政府承認ノ問題研究ナレ居リタル當時ヨリ「ポーランド」日本側一部ハ承認ノ前提トシテ「アンガマン」及「ニコル」諸島ヲ同政府ノ領土トセンメ以テ同政府ノ承認ラシテ國際法上正當ノ承認ノ實アラシメントスルヲ蓄志存シ居リタルハ偏々同年十月三十一日假政府承認ニ對スル謝意表明ノ納入セル「ポーランド」主席カ十一月五日及六日ノ大東亞會議ニ「オウサー」ウアーントニテ發言列セル故有及籠絡郵船、軍艦等トシテ官民並ニ其トスルヲ要望シテ「克羅國」收邊トカ吏使等トシテ津邊ニテ打御意故作被急速實施ノ事案ナリ。

外務省

機關出席セル陸軍代表栗原良首おより印度獨立ノ第一階
 段トシテ用テ帝國軍ニ於テ右領中ノ印度領「アンタマニ」諸島
 及「ニコバル」諸島ヲ近ク自由印度假政府ニ降服セシケル用
 意アル旨「聲明」セラレタリ、帝國ニ於テハ右聲明ニ基キ本
 件諸島移管ノ方式等研究ナリシモ實現ニ至ラズシテ
 終戦トナリタルモノナリ

五「ボリス」氏ノ第二次東航ハ十月下旬ヨリ十一月中旬ニ亘リ其ノ
 馬十月五日及五日ノ大東亞會議ニオケザリケア「ト」シテ終
 列セルガ政府及統帥部ノ主張者トノ旨見ニ於テ「ボリス」
 氏ノ持出タル要望ハ一、老練國政進下外交使以即ノ派遣ニ對
 印度改作戦ノ急進ニ支應シニ是ニ於テ亦右老練國政政府及
 國民軍ノ自主的運動ニ對シテ餘リニ干涉的ニシテ獨立運動
 ノ進展ヲ阻害スルト共ニ他方軍内務ニ於ケル其等之權微弱

外 務 省

ニシテ印度側ノ要領ヲ南方總軍、大東亞及帝國政府ニ對
 シテ充分ニ反映シ得サルヲ以テ帝國政府ニ對シテ外交使節ノ派遣
 ヲ要請シ假政府ト帝國政府トノ關係ハ右「チヤネル」ニ依ルモノトシ
 他方軍事的ニハ老練國政ヲシリタリ、ミフシヨシニ改組シテ之ニ對シ
 ルルカ歐ハ之ヲ廢止シテ南方總軍及ヒルマ方面軍ト直轄交歩ヲ
 ナスコト然ル可シト湯ヲニ至リシカ後勿論然ニ至ル迄解決ヲ見ルニ
 至ラス、後者ハ一九四四年四月以後ノ「イニバル」作戦トナリテ
 現ハレタリ

對印度進攻作戦ニ関シテハ「ボリス」ハ第一度采録ノ際ニ於テ既に
 其ノ急進實施ノ必要ヲカ説シ、印度人ハ自カノミヲ以テシテハ
 到底英勢カヲ抑友ヨリ擊退シ得サルコトヲ熟知シ居リ他方
 印度大衆ハ「シニガポール」ノ陥落「ヒルマ」ノ敗戦ニ不向尚所
 度内ニ於ケル英軍ノ不敗ヲ信シ居ルモ、若シ日本軍ニシテ印

外 務 省

友ニ侵入シ印及大衆ノ眼前ニ於テ英國軍ヲ撃破スルニ於テハ
 印及ノ反英運動、独立運動ハ大ナル利戟ヲ受ケテ急進ニ
 熾烈化スベシ、而シテ日本軍ニシテ則チ矢也ス印及ニ侵入ス
 ルニ於テハ印及人共負ノ二五%ハ日本ニ加擔スベシ等ノ諸点ヲ
 述べタルガ、予ニ次乘勢、際ハ東條首相及杉山參謀總長
 ト會見シ、空ニ必要ヲ強調セルガ杉山參謀總長ヨリ海軍備
 本ノ改定ヲ實施スベシ、尤モ準備完了ノ時、ハ今日ヨリ所言ニ
 得ストイフ程友ノ回答ヲ得タルノミナリシ程様ナリ、右ニ関
 聯シテ海軍又ハ八軍令部並高ハ陸軍印及進改作戦ニハ消極
 的ニシテ特ニ戦守後期ニ於テハ太平洋正面、防禦ニ苦心シテ
 リタルヲ以テ印緬國境方面へ、戦力分散ニ強硬反對意見ヲ
 表出セリ

一九四三年春「インパール」作戦開始セラルルヤ「ボース」司令官及ハ同
 外務省

印及國民軍ノ主力(ニヶ師)ヲ奪ヒ之ニ急加三月下旬日本軍
 ト共ニ印緬國境ヲ越ヘテ印及疆内進出セリ(尚モ町印及
 國民軍ノ全兵カハ三ヶ師ナリ各師ハ遊撃隊隊三乃至四
 連連、衛生、補給等ノ諸隊隊力附屬ニ裝備ハ甚チ力ナリ
 印及作戦開始後其内「ビルマ」ニニヶ師馬車ニ一ヶ師アリ)右作
 戦ニ際シテハ大本營發表ニルルカ如ク帝國ハ「印及國民軍
 ヲ支援スベシ、印及疆内ニ進入シセル旨ヲ宣傳セリ、「ボース」
 主席モ四月四日、予ニ次乘勢ニ於テ印及國民軍、印及進
 入ヲ發表スルト共ニ自由印及假政府ハ印及國民唯一ノ合法
 的政府ナルコト解放地區印及民衆ハ印及國民軍及假
 政府任命ニ係ル行政官更ニ對シ協力スベキコトヲ要請セリ
 六、對印及改作戦實施方針ヨリ改ニ惡化ノ一途ニ在リシ陸軍
 ト假政府及印及國民軍トノ關係ハ右作戦ノ失敗ニ依リテ

外務省

接收し得サル状況ニ陥リ、陳誠ニ帰シタル仰及國民軍ノ再
 建ノ問題、新軍態ニ對處スル爲、對仰エ作、再核討
 ノ問題等、重要ナル事項、山積シタルニ不拘、何号現地ニ於テ
 解決シ得サル事情ナリシヲ以テ「ボリス」氏ハ屢次采躬ノ帝
 望ヲ表明セルモ、陸軍部中現地陸軍部員ハ國民ノ采躬
 ヲ喜ハス之ヲ阻止シタルモ、東條内閣退陣シテ、内閣内閣
 ルニ及ビ、新内閣ト協議スル爲、漸ク「ボリス」氏ノ采躬ヲ允ルニ至
 リ、一九四四年十一月一日、采躬ニ對シテ、
 采躬ニ次采躬ノ際、「ボリス」氏ト大東洋ノ事ニ仰及國民軍ノ取
 扱ニ関シ、覚書交換セラレタルカ、内閣ハ仰及國民軍ノ
 帝國軍隊ニ對スル協力ノ際ニ於ケル、指揮系統、國民
 軍ノ兵力、防務、兵力、仰及國民軍ニ對スル兵器、器材、糧
 秣等、補給軍費、貸与、教育等ノ諸事項、互ニ互ニモ、右ノ内

外務省

我々ノ援助ニ関スル諸項目ハ、事案上之實施ニ可能ニ終レリ
 新ニ國民軍ノ兵力増強及裝備改善ノ問題ハ、「ボリス」氏初
 ヲリ熱心ニ主張セルトコロナルモ、日本軍自身兵器不足及補
 給困難ニ苦シム、在リタルヲ以テ、遂ニ實現ヲ見ス、「ボリス」氏
 ハニニ強ク不満ヲ有シ在リタリ
 假政府ニ對スル外交使節派遣ニ付テハ、本連ノ如ク、若初ヨリ
 「ボリス」氏ノ熱望セル所ニシテ、假政府承認アル以上ハ、外交使節
 ノ交換ナカラサルベカラストノ旨、海ナリシカ、氏改ニ望リテ、先據國
 ト假政府トノ關係、急々其ノ氏、改ニテ、推移セシカ、「ボリス」氏
 於テ主席ノ地位ヲ放棄スル危険ヲ、度シタルヲ以テ、重光外
 相ハ之ヲ深慮シ、之ヲ勿用ニ若慮シ、結局陸軍部例ヲ説
 得ニテ、假政府ニ對シテ、任命全權公使ヲ派遣スルコトナレリ
 然レドモ、假政府ノ移爲シハ、軍事ニ関スルコト多キ故ヲ以テ、軍

外務省

側ニ於テハ引續キ假政府ノ務ヲ攝衛ニ當リ及テ臺灣ナリ
ニ爲同公使ノ使命ハ純然タル儀禮的ノモノニ止マルコトト
シリ。之即チ昔年十一月二十一日ノ最高裁官手稿第百三號ニ於
テ左記ノ如ク報告アリタル所以ナリ

上記

最高裁官手稿第百三號 (昭和十九年十一月三十一日
最高裁官手稿第百三號報告)

報告第七号

仰及假政府務專三國スル件

- 一、帝國政府ハ外交代表ヲ仰及假政府ニ派遣ス
- 二、仰及假政府ニ関シテハ從來大正公法之ニ依リテ係争公認
之ニ協力ス
- 三、第一項ノ外交代表ハ仰及假政府ニ関シテ大正公法ニ依リテ係争
公認ノ長一區處ヲ受クルモノトス

外務省

以上

本件特派公使ハ右ノ如ク性質アリシ爲假政府例コリ交換的ニ外
交使節ノ派遣ヲ受クルコトナリ居ラス我方トシテハ正式ノ外交
關係ノ設置ニハ能ル立止アリ居リタル次第ニシテ是レ本件ハ公
使ニ任セラレタル際公使ハ陛下ノ御信任状ヲ携行セザリシモ
ノナルカ他方「ボリス」主席ハ我方ノ公使特派ヲ以テ正式ノ外交關
係開設ノ如ク解シ居リタル爲御信任状世キ公使ヲ攝衛シ得
ズト主張ニテ譲ラザリシ爲帝國政府ニ於テハ御信任状ニハ
能ル國書ヲ準備シテ之ヲ提示才豫定シ居リタルモ右ニ至ラ
ズニテ終致ヲ見タリ

又克様閣ノ改選ニ付テモ「ボリス」主席大正當ト「ボリス」
氏百ニ應諾合纏リタルモ「ボリス」主席大正當ト「ボリス」氏百
リ智從ラズケタルカ終致時ニ至ルモ「ボリス」氏百解決ヲ見ルニ至ラザリ

外務省

七、「ポー」氏ハ其ノ親支及親蘇聯ノ意見ヲ帝ニ公然ト表明
 シ居リテ三次采躬ノ帰途南東ヘ立寄りテ代理トシテ秘書
 「ハワサニ」大尉ヲ重慶ニ派遣セントセルモ全然ヲ見ルニ至ラ
 ズ又屢次独ノ對蘇聯同然ヲ獲スルカ如キ言葉ヲ洩シ居リ
 タルカ一九四四年半頃ヨリ独逸ノ敗北必至ナリトノ見解ヲ
 抱キテ三次采躬ノ際ニ薩克外務大臣ニ對シ自由印友假
 政府ノ對蘇聯協定ニ付意圖同ヲ敲キシモ因外相ハソ聯側ニ
 之ヲ受ケテ然ル可能性ナシトシテ反對セル確據アリ、「ポー」
 氏ハ協約自己ノ意見ニ於テ在来ニ蘇聯大使ニ對シ高友
 ニ近リ書翰ヲ送り面會ノ希望ヲ傳達セントセルモ二回
 因ニ於テハ書翰ノ交授ヲ拒否セラレタリ
 其後蘇聯ノ惡化ト共ニ「ポー」氏ハ日蘇諒解促進ノ件
 介商酌ノ爲メ執ラントノ着想ヲ抱スルニ至リ東御外相ニ諒り

外務省

采ルニ付外相ハ上海ヨリニテ「タス」通信代表者ニ「アプロヤ」
 スルモ可ナラントノ意圖アリシモ「ポー」氏ノ支那行ノ可成ナリシ
 ヲ以テ沙汰止トナレリ
 八、然然ニ際シ日本政府ニ於テハ「ポー」氏ニ於テ其ノ意圖「ア」ハ
 月下ニ采ルベキ旨申付ヘタル事主席ハ右示唆ヲ容レ上京
 ノ途ニ上レルカ途申台湾ニ於テ飛リ殊事故（龍陸後五丁）
 采躬ニシテ「ア」氏ニ至リ墜死傷病院ニ於テ死去
 ノ事跡云スルニ至レリ。尚同主席ノ及傷ヨリ死ニ至ル迄ノ
 態度ハ勇敢剛強トモノニシテ人クンテ痛ク感激セラレタリ
 以上

外務省

外機密

電信寫

A7009-29 考

昭和15 一八九二〇 暗 甲谷陀 五月三日發
本省 四日前着

松岡外務大臣

岡崎總領事

第八七號(極密、館長符號扱)

往電第八五號(回シ)

往電郵第一號當時ハ血氣ニ過ル青年ノ計畫ナキ策動ト見テ深入ラ
避ケ居タルカ純ニ「サラント」ノ如キ地位財産ヲ有スル老成ノ者
迄眞面目ニ考ヘ居ルモノトセハ一慮ニ之ヲ「デスカンジ」スヘキ
ニ非サルカ如シ殊ニ「アオクフマブツク」ノ「マナラス」コング
レス」其他ノ方面ノ獨立運動ニ對スル最近ノ動向並ニ各地ノ所
謂「インテリナラ」イフ「ト」一等ノ方向ヲ如何ニ別シテ英米諸

身勝手ナル態度 相俟テ相當人心ヲ刺戟シ居ル高層カ、
テ右カ英帝國主義擴張ノ實際運動ニ變化スルニシテ空想ノ「ミ
切」サル如キ「サラント」一等ノ計畫ハ未ダ實行ニ至リ得ラズ
又假令實行セル場合モ實力充分ナラズンテ失敗ニ終ル傾多カル、
キカ當方面ニ及ホス影響及擾亂ハ何ノ途我方ニ不利カラサルヘキ
ヲ以テ此ノ際「ボクス」ト「聯絡位」ハ好意的ニ取計ヒサルニシテ
ル「シ」ト考ル次第ナリ
尙書方「サラント」ト「聯絡」ハ充分内幕ニ維持シ得ル見込ナリ
前電補促券「了」

S 1.7.0.0 - 44

31

S 1.7.0.0 - 44

30

外機密

電信寫

A200.9-29

昭和16 一九七八 暗 甲谷陀 四月三十日後發
本省 五月五日前着

松岡外務大臣

岡崎總領事

第八五號ノ一（極秘、館長符號扱）

貴電第五一號ニ關シ（「ボース」ノ動靜ニ關スル件）

像テ「ボース」ノ兄 Sarat C. Bose （元「ロングレス」ノワーキ

ングコミテイ」ノ「フォウワドロツク」ノ財政援助者ニシテ現ニ

事實上其ノ指導者當地ニ於ケル最有力者ノ一人ト會見ノ約アリ

タルモ英國側監視ノ爲遷延シ漸ク二十七日當地郊外ニテ面會セル

カ其ノ談話中參考トナルヘキ點左ノ通り（會談後便ヲ待チ送付

ス）

一、弟ハ像テヨリ極軸側ノ勝利ヲ期待シ早キニ及シテ三國及蘇聯邦

首腦部ニ對シ印度問題ノ意見ヲ開陳シ獨立援助ヲ求ムル異アリ

ト爲シ客年一月捕ハレテヨリハ自ラ右諸國ニ赴ク計畫ヲ立テ遂

ニ家族ニモ知ラセス之ヲ決行セルカ阿富汗ヨリ安着ノ旨及黨員

ニ對スル脱出理由書ヲ送付シ來リタルノミニテ其ノ後聯絡取レ

ス（續ク）

外機密

電信寫

昭和16 一 一九七五 暗

甲谷陀 四月三十日後發
本省 五月 五日前着

松岡外務大臣

岡崎總領事

第八五號ノ二(極秘 館長符號扱)

三「フォウワドブロック」ハ目下「コンGRES」トハ全ク別離状態
 ニ在ルモ黨員百萬ヲ擁シ相當ノ團結アリ幹部ハ此ノ際印度獨立ノ
 爲事ヲ舉クヘシトナン準備ヲ進メ居レルカ最大ノ障害ハ武器入手
 ノ困難ト同黨ノ中心ヲナス「ベンゴウル」青年層ニ軍事的訓練ヲ
 缺クコトナリ又弟トノ聯絡ナキ爲將來ノ方針決定上指針ヲ失ヘル
 狀況ナリ

三、就テハ日本側ニ於テ在伯林ノ「ポ」ト聯絡シ其ノ消息及黨將來ノ

S 1.7.0.0 - 44

34

行動ニ關スル指令等ヲ取次カルルコトヲ得ヘキヤ（松岡外相其ノ
他三國側有力者ト會同シ居ルモノト思フニ付之等ノ消息モ合セ）
又時機熟スルニ至ラハ日本側ヨリ武器及資金ノ援助ヲ期待シ得ル
云々

（續ク）

B 1.7.0.0 - 44

35

外機密

昭和16 一一九七九 暗 甲谷陀 四月三十日後發
本省 五月 五日前着

松岡外務大臣

岡崎總領事

第八五號ノ三（極秘、暗長符號扱）

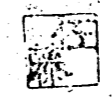
惟フニ大量ノ武器密輸ノ如キハ容易ニ實行シ難ク又一「フォウウ」
「プロック」ノ買力充分ナラサルハ事實ナルヘキモ現在印度民衆間
ニ澎湃タル獨立及英帝國主義排撃ノ氣運ハ同黨ノ舉兵等何等カノ
切掛ニ依リ大衆的實際運動ニ點火スルコト無シト云フヘカラス旁
我方トシテモ尠クトモ「ボ」ト其ノ黨員ト連絡スルコト然ルヘシ
ト存スル處右ニ對スル何分ノ御意向其ノ他本官ノ心得ヘキ點御聞
電アリタシ（了）

電信寫

B 1.7.0.0 - 44

36

A. 7. 0. 0. 9-29



第三資料第二三號

昭和十七年三月

印度ニ於ケル各種勢力ト其動向

(附 赤化及反共的諸要素ノ考察)



外務省調査部第三課

42
42



REEL No. A-1204

0044

アジア歴史資料センター